

3—ホームの一日

(1) 朝

ベッド暮らしのせいであろうか、生命めざめるホームの朝はことさら早い。決められた起床時間もないのに、夏は五時、冬でも六時になるとすっきり騒めく。夜も休まず働いている二人の夜勤寮母はいっそう多忙になる。録音された小鳥の声が朝を告げ始める。洗面に起らない十八名におしぼりが配られ、七時には全員の身づくろいは終っている。

赤星さん(八三)にとって朝はとくに多忙である。枕灯の上のご主人と息子さんの写真とダンボール箱のお位牌^{いはい}にお茶を供え、つき残ったお茶を味わうようにする。隣りのベッドの動けない婦人にも震える手でお茶を入れてあげる。「わたしには家族が多いので、忙しい。仏さんのお守りと植木鉢の手入れがありますからね」。補聴器をたえずビービーいわせながら話す。赤星さんは養護ホームから病院へ、それから任運荘と施設生活が長い。だから、寮母を見る眼もきびしく、つかまる



と話が長いので、朝は寮母もつとめて近よらない。

冬ならば、まだ明けきらず、ホーム内だけが光に満ちているのもエキゾチックだ。その廊下を前もって寮母に予約していた者は車椅子に押され、ある者は歩行器でゆるりゆるりと歩を進め、礼拝室をめざして三々五々集まってくる。ここには来るものすべてを抱きよせるように阿弥陀如来が待っておられる。お互いの浄財もこめられてやっと安置できたものであるだけに、いっそう身近く感じられるのであろう。

夏ならば半数近く、冬は十五人ほどそろい出すと、夜明けから出勤している園長と共に読経が合唱される。冬がめだつて少ないのは、老人にとって寒さが一番こたえるからである。

園長が不在と分かっているにも、出席者の数に変わりなく、読経のあとの体操もテープ係の声で行われる。こうした行事への出席に陰日向なく、本人の意志で決められているのは、何よりの救いである。

信仰はさまざまに分かれていても、一室に集まって阿弥陀を念ずるのも、一日の出発のけじめを自分につけようとする意欲の現れである。この場は皆が朝の挨拶を交わす所であり、今日一日の情報を伝える時間でもある。

朝は張りきっているのです、この場が不満の吐け口になることもあり、稀にいさかきもあり、叩き合いさえも一度はあった。

ホームの新聞『にんうん荘』（第10号・51・8）は伝えている。

朝のいさかい

広瀬さん（九三）は仏間に座る人びとに向つて訴えました。「私は昨日、中廊下で羽田野さんから大声で叱られました。どういふことであるか、もう一度昨日と同じに皆の前でいって下さい」。羽田野さんは両隣りのおばあさんから膝をつつかれて前に出てきました。「それはこうです。ホームの周囲に草がたくさんできました。園長さんが毎日草むしりをしているので、私も少しでも手伝いたいと思い、始めましたが指先が痛くなり、元気な人たちが少しでも加勢したらと、長老の広瀬さんに相談しました。すると、広瀬さんはわしは病気でここに来ているので、医者 of 許しがなければというのです。もう一つは毎朝勤行の時燈明を点しているのに、広瀬さんはそれ以外に誰もいない時一人で燈明をあげている。火災の危険があると注意しても、いふことを聞かないので、たしかに私も年がいもなく大声を出しました」。

二人とも耳が遠いので、話しはなかなか噛み合いません。私は羽田野さんにいいました。「広瀬さんは見かけは元気でも、体の具合は悪いのです。でもあなたが加勢したいというお気持ちは本当にありがたいことです」。老人は分つたような様子です。

広瀬さんには、「仏間でのお燈明は誰もいない時はしないで下さい。羽田野さんのことは若いから大声も出るので、年長者として許してあげて下さい」といいました。

「ああ、分つてくれれば良いです」。皆さんに聞いてもらったことで、心が広くなったようです。

羽田野さんは巡査をしていたせい、よく大声を出してしまふ。こんな争いも幼い子らの兄弟喧嘩でいどにしか思えなくなる頃には、こうした派手な、やりとりも影を潜めてしまった。老人がホームに慣れたためもある。寮母も扱いに手なれたせいもある。それとも五年めに入ろうとするので、心身が弱ってきたためであろうか。開所当初定員に達した頃の五十人は今は二十人となった。施設はどうも人をおとなしくさせてしまふようだ。

ああ、開所当時のあの騒々しさはどこに消えたのか。

朝食

八時。朝のメニューは簡単であっても、当番調理員はその内容をていねいに放送する。日に三度の放送も調理と同じように気苦労らしい。

ひと頃は食堂に出てくる者は十二名まで減ったが、今はまた二十数名にまで復した。数に変動があるように、食事のとり方にも改良がなされる。初めは食堂でいっせいに食膳を待っていたが、今はそれを止めて、運べる人はめいめいが隣の厨房まで行って、お膳を整えて運ぶようになった。歩行がやっとの人や歩行器の人の分を運ぶものもある。

お櫃おびからご飯をよそうのは婦人の方がよいらしい。お茶つぎは男性。お汁だけは鍋が熱いので寮母が配り歩く。危ないから。

「頂きます」声高きいう者。黙って合掌する人。「よばれるで」と方言丸出しもいて、家での習わしがそのまま持ちこまれていて。食事も静かになって久しい。「人間は会食できる唯一の動物」という。もう少しそろってするマナーと欲談があつてよいのだが、おしつけることは控えよう。

食べ残しはまとめて片づけやすくして、寮母の手助けをする。下膳のできる人十名ほどが厨房まで運んでくれる。「すみません」という台所のお礼の言葉に老人たちは満足そうに、笑顔で返す。食事がすんでも、老人たちはすぐには帰らず、食堂や広場で今しばらく一服を続ける。それは部屋で食事をしている人たちへの思いやりである。弱い人たちは食事も遅く、せかすようになってはいけなからという。雑居部屋では弱い者を軽んじる者が生じがちだから、この雰囲気は貴い。

ベッドの上で食事をしている者が三十名足らずだが、その理由はさまざまである。食堂に出ることを好まず、食事はひとりで気ままにしたいとしている者が十三名。残りの十五、六名が不自由なためにそうなっているが、食堂が狭いためもある。食堂が狭いということは設計ミスである。寝たきりという観念にとらわれすぎて、二十名の食堂さえ広すぎると考えていたことを恥ずかしく反省する。現在、食事の一切を介助しなければならぬ人は五名にすぎないから、ほぼ全員がベッドを離れて食事をするができると考えねばならない。だから、最近こんな工夫をしている。食堂に行つた老人たちの部屋には一、二名が残っているので、その人たちを各部屋に数名ずつ集めて会食できる方法を考えた。

テーブルを置き、車椅子で移動するが、寮母の間はまたふえる。それに比例して、重度の人た

ちの食事の喜びは深くなった。

特養も生活の場であるというかぎり、ベッドで食事することを当然のことと考えてきた過ちを改めねばならない。

それでも、自分から皆の前に出て一緒に会食するのを遠慮しているのが二人いる。施設側としてもどうしようもなく、心の中で許しを乞う。二人は悪臭のためこれまで病院をたらい廻しされ、ついに任運荘を安住の場所と思い定めねばならない苦境にあった。清拭は徹底して行われ、消臭剤をさまざま試みた結果、ようやく同室者にも気づかれないうまくなった。しかし、特殊な病気であるため、立上ると内部が脱出し悪臭が漂う。集団生活では悪臭が一番の障害になる。

清拭と入浴

入浴は週三回。不自由な人には毎日清拭がなされる。それは約二十名。ベッド生活にとって、清拭は秘められた小さな悦楽であるようだ。性がこうした形でもかろうじて満たされているのである。ともあれ、特に要注意者には排泄で汚れる度に清拭をくり返す。床ずれを防ぐためである。老人に一番心待たれているのが入浴。朝九時から始めて夕方に終るので、寮母にとっては多忙な日。前日から準備している婦人もあり、風呂敷に着替えを包み杖にくっつけて、浴槽に向う姿はユニモラスである。三〇メートルの距離を十分以上もかかって辿りつく人の中に拍手を送る。

一般浴室では二人の寮母がかいがいしく世話しているせい、三十名余りの賑わいが湯気と共に

溢れている。ここには裸のつきあいがあるからだろう。

夏は自分で入浴できる人には毎日準備されているが、そうになると毎日が入りたがらない。寝たまままで入浴できる特殊浴槽利用は十五名余り。自由が楽しめる一般浴室がよいので、日によってはそこに行ける者がいるので一定しない。まず、ベッドからストレッチャーで浴室へ。その間の風邪をひかさぬ配慮が雑だと冬期は危ない。じっとしたままで、浴槽が上下するので快適だから、皆が長湯を要求する。二機並べてあるので、一人が湯舟につかっている間に、もう一人の世話ができる仕組みだから、一人二〇分の入浴が楽しめる。

終って新しい肌着に着替え、ベッドのシーツも換えられ、髪も洗っているから、ベッドに憩う顔にはつやが漂う。しかし、寮母たちは冬でも汗だけで、午前中それでつぶれ、午後四時に終れば順調に進んだことになる。^{注1}

一度に十数名を入浴処理するベルトコンベヤー式の浴槽風景を見たことがあるが、もはやそこには入浴とかお風呂といった情緒はなく、洗滌といった方が適当であろう。さすがに東京都内の某施設では、利用者の反対の声で使用中止にして放置したままであった。妥当な処置といえよう。

ふだんでも寮母室に職員を見ることは稀である。働く人数の割には職場が部屋部屋に散らばっているからである。廊下で見かける時は皆が小走りをしている。

だから入浴日は寮母室はすっかり空っぽと思われるが、この日は二人の看護婦がすべてを処理する。ナース・コールに応じておむつ換えに走り回る。看護婦も全員寮母制の中におかれ、寮母の仕

表3 日常生活自立度の状況(55.6.1現在)

		区 分	実数人	割合%	
歩 行	自力歩行		9	18	
	歩行補助器使用(つえ等)		15	30	
	車いす使用		6	12	
	歩行不能		20	40	
食 事	自分で可能		34	68	
	一部介助		11	22	
	全面介助		5	10	
入 浴	自分で可能		14	28	
	一部介助		12	24	
	全面介助		24	48	
着 衣	自分で可能		16	32	
	一部介助		11	22	
	全面介助		23	46	
排 便	昼 間	便所	自分で可能	21	42
			車いす使用	0	0
		便器	自分で可能	6	12
		要介助	5	10	
			おむつ使用	18	36
	夜 間	便所	自分で可能	13	26
車いす使用			0	0	
便器		自分で可能	14	28	
		要介助	5	10	
		おむつ使用	18	36	

事を代って処理している。私はある研修会で次のような質問をされた。看護婦と寮母はどちらが上位か、またその権限の区分はどうあるべきか、例えば老人にお茶や水を飲ますのはどちらの権限か²⁾。質問の気持ちはよく分かるが、答えようがなかった。任運荘では全員寮母室におり、職分は明確に分かれているが、老人介護の境界線ではお互いが入り込んですぎ間を作らないようにしている²⁾としかいいようがなかった。

さて、入浴をすませた人たちのために看護婦は、午前と午後一回ずつリハビリの指導を受けもつ。

テープに吹き込んだものを放送しながら各部屋を見回る。テープ放送は小規模施設の職員不足から生まれた知恵である。

テープは季節の音楽から始まる。いろいろの懐かしい歌が高く低く移っていく中を、各自にあう軽い体操を呼びかける。病弱者を中心としているのでテンポは緩い。ひとりずつ名前が呼ばれ、その人に応じた動作を求める。何とか歩ける人には歩行器を使って広場まで誘う。重度の人には布団の中で手先だけの運動をお願いする。三〇分の長さだが、吹きこんだ四人の声の違いも、単調な生活では効果があるらしい。テープの吹き替えを忘れて、うっかり先日死亡した人の名前がそのまま放送されるミスも起こる。「ゲンが悪い」と怒る婦人。「忘れずに名前が呼ばれている」と感心するひと。さまざまである。

ちなみに、任運荘に生活する老人たちの日常生活動作の残存能力の度合は表3に示す通りであるが、他の施設に比して入所時においては特に重度すぎるとか軽度であるといった差は感じられない。ただ、処遇面の違いによって相当程度の差異が生じているということが出来る。その対比は8章5節の「小さな効果」で示すことにする。

注1——「老人ホームにおける老人処遇と職員の労働条件」（52年・全社協）によって、夏の入浴の全調査を見ると、「一部介助を要する者」では週二回が一番多く七一・七%、一回が一五・五%、三回は八・二%で一割もない。「全介助」では更に減って、二回は五六・七%、一回が三五・四%、三回はわず

かに四・九%となっている。厚生省の「最低基準」が示す「週二回以上入浴させ(十七条)」よということ
が、逆に現状は「最高水準」になってしまっている(五三頁)。

「任運荘では週三回」というと、施設関係者の中には「入浴日が三回で、入浴は二回ぐらいだろう」とし
たり顔をするのがある。全員週三回、とても考えられないというのである。

注②——老人にどれだけ水分を与えるかは、じつは特養によっては重要なことのようなのである。すぐに排
泄に、したがって寮母のおむつ介助に影響するからである。ある研修会である施設長は「始めのしつけが
肝心だ。お茶や水は一定時刻に一定量ときめればよい。勿論夕方からは与えない」と自信満々であった。

これは残酷なことだ。自分の老親であればやはり湯や水を抑制するだろうか。いったい老人にとって水
分は重要な関係があり、その調節によって生命の長さまでも調節できるのである。老いては渴いていても
喉にその感覚が鈍くなっている。がまんしていると渴いていないと思っているのは、老年の生理に無
知な証拠である。

(2) 昼

十一時半になると、再びおしぼりが配られ、歩ける者は手を洗い始める。調理員の献立放送が流
れる。今日は初めての冷凍品使用で心配だったとか、味噌を変えたが味はどうかなど、そのつ
どの工夫を語りかける。放送は食欲をかきたてるだけでなく、調理員じしんもホームの老人たちの
処遇に参加していることを意識させるに役立っている。先のリハビリのテープ放送と共に任運荘の
小さな考案である。群馬県某ホームの報告文に、寮母がいよいよ配膳にとりかかる時、厨房に向っ

て三度三度改まってお辞儀をし、「頂いていきます」「ありがとうございます」と、お礼を述べてから受け取る朝の風景があった（加藤道子『老人ホームの四季』）。これは少し変だ。利用者のために存在する職員どうしではないか。他人行儀も節度ある^{しやう}躰として必要かもしれないが、逆に冷やかさと隔りの溝をいよいよ固定してしまふ役割りを果たしかねない。

昼食

食事は誰にとっても一番重要で、一番の楽しみである。全面介助の五人にとっては尚のこと、生命に直結する重大事である。

夫を某特養ホームに入れた経験のある婦人が、訴えていた。「八人部屋でずらり並べて食事を世話するのだが、おしまいの番になると、おさじで二口ほどほりこんだと思ったら、ハイおしまいでした」。

想像もつかない処遇といわねばならない。

全介助五人のうち三人は二〇分から三〇分ていで終るが、あとの二人はたしかに長い。四〇分から一時間に及ぶのである。一人はまずお酒一合を楽呑みでちびりちびり始めて、飲み終らねば食事に移ろうとしない。この人専用の音楽テープも流さずという念のいれ方である。若い寮母が当番であると話しがはずみ、お説教にも熱がこもる。もう一人の婦人は食べながらの会話が最高の楽しみ、これを失うことは処遇を奪われることに等しい。そのことを知っている寮母は横向きなんかの

姿勢をせず、真ともに向きあっている。

流動食の人には、たとえ意思表示が極微であっても、「これはお魚、これホーレン草よ」と説明しながら介助する。少しでもテンポが早くなると直ぐに咳きこむ。一部介助の方が全面介助の重い人より手間どるが、自分で食事する意志を重視しなければならぬ。食べている姿も、食べ終わった有様もすさまじいが、前掛けで防いでいるから、襟元、膝元が汚れることはない。

しかし、そうした介助ができるためには職員総動員である。寮母は最低五人は介助に当たれるが寮母主任、指導員、看護婦も加わる。もはやこの時間に職種の違いはない。世話の行き届かない特養に床ずれが多いが、食事介助の不十分なため栄養がとれていないのも原因の一つであろう。まして、床ずれができたら、栄養補給に全力をあげねば、治りようがない。その意味で、床ずれの発生は介護、処遇の総合的な貧しさの結果といえよう。

昼休み。やっと来た。

うち見たところ、ホームではいつも時間は止っており、植物的生の微かな息づかいだけがあると映るだろう。住人たちにとってはそうではない。何かしら時間に追われ、プログラムに動かされる一日であるらしく、休息がほしいというのもある。放送やバックミュージックがうるさいと怒るのもある。「喫茶店ではない」とどなる。「わしは今まで働きづめだった。もう何もしたくない。ただ眠らせてくれ」と寝てばかりの婦人。でも、この人は食事となるとガバッと起きて、食堂へ急ぐ。

休み時間は自由の時間、いっそう静かになる。いつの間にか午睡に陥る人。隣室の病人を訪れる人。短歌作りだろう、思いにふけている人。

一時間が過ぎると、寮母が働き出す。再び空気が動く。集会室のテレビが高鳴る。そこに集まる者は七、八人、放送も活潑になる。活動できる人のための時間となる。編物を始める人は五名。習字三名。裁縫も四人ほどいる。

おむつたたみに出かける常連は三名、しかし、男性一人が新しく加わった。工藤進さん(七八)は一番元気な組に入るほどであったが、病に伏した時の寮母の暖かい看護と、熱いお湯での清拭の気持ちよさ、そして、しわのない清潔なおむつが肌にあふれた時の嬉しさが忘れられず、おむつたたみの加勢を思い立ったわけである。今では男であることの抵抗もなくなって、おむつたたみの女性軍の中に溶けこんでいる。

四人は寮母たちの手伝いとしてホームの貴重な戦力である。おむつたたみ専任のパートタイム三人を助けて、千枚のおむつの山をゆっくり崩していく。

冬の間はほとんど室内に閉じこもっているが、春になると様子は一変する。眼の前の草花の世話が始まるし、散歩組みが増えてくる。近くの店へ買物を楽しんだり、動きは陽光と共に始まるようだ。「ある日の戸外散歩」の見出しで報じた『にんうん荘』(22号・54・5・1)便りを紹介する。

春です。寝たきりのほかに六名が車椅子と杖を持って集合しました。今日は寮母がついています。

初めて参加のYさんは車の上で緊張気味ですが、後から男性に押ししてもらって、嬉しそうです。

高台から一望する町はゆらゆら光の中に浮び、別世界のように緑の中に息づいています。「あれが小学校、四角い建物は工業高校……」と説明すると、皆いちいち感心してうなずきます。

——帰りはあっちの道を帰ろう。

——でも、あの道は車が多くて危いわよ。

——せわねえ。時には違う景色も見たいわな。

それならばと、皆の意見に従って歩き始めたものの、耳の遠い人たちばかりです。

——あ、Sさん前から車が来たよ。あ、後からもよ。Yさん、もっと右によけて。そうじゃない。

ハンタイ！ あらあら何度いってもまん中に寄るんだから……。

——ハイ、ハイ、車よりも寮母さんの方がおじいの方。

皆大笑い。やっとホームの建物が見え始めて、ホットするとこんどはM婦人が尿意を訴える。近くの木蔭で用を足してもらう。その間男性群は遠景の桜を観賞しています。ほどなく現われて、「アー、スットした」再び大爆笑。

こちらの心配をよそに、老人たちは春を満喫したようです。

三時

入浴日でない時、一切の介護の雑事や月の行事はこの時間で処理される。月一回の「担当寮母と

の話しあい」の時間は苦情もいえる心の晴れる日でもある。ロッカーの整理、爪切り、散髪、ひげそり、こまごました作業はきりが無い。シート交換は度数が多く案外手をとられる。一般は週二回寝たきりはその外に入浴の度に換え、汚せばそのつど換える。

三時は同時に老人たちが広場に総ぞろいする時間でもある。午前と同じでまず体操から始まる。寝たきりも移動して来る。晴天の時は中庭の芝生で日光浴。室内に残ることを希望する寝たきり老人には、室内作業の寮母が声をかけて心を浮きたたせる。

四時

やっと寮母たちに三〇分の休息。それでも当番寮母は残っている。放送は休まない。新聞、物語一日の出来事などが流される。三〇分はあっという間に過ぎた。

再び五つのポットで熱い湯が各室に配られ、お茶をたて、五時の夕食を待つ準備が進む。

夕食

余りにも早い夕食時間である。任運荘の弱点はここにある。しかし、三〇分遅くすれば、全職員の間をそれだけ延ばさねばならない。したがって、出勤時間をそれだけ遅くしなければならぬ。食事介助には全員が当たってもなお足らない程だからである。

参考のために全国的な調査結果をみよう。全社協・老施協が昭和五十一年八月に行った全国の特養に対するアンケート調査であるが、一番多い夕食時間帯は四時半～五時の五三・八%、つぎは四時～四時半で三三・五%、私たちと同じの五時～五時半は僅かに一〇・六%にすぎず意外である。返答した三六七ホーム中、三時台が三施設、理想に近い六時台は二施設のみであった。こうした実態に対して寮母たちの意識を問うと、「それでよい」とする者七〇%、「改善の必要あり」は二二%で、職員本位の処遇の実態がここでもありありと示されている。

七時に夜食代りのおやつで我慢してもらおう。

(3) 夕

ただ走り回るだけだったような一日にも終りが来た。六時近い。寮母たちは家路につく。ガラス窓越しに見送る年寄りたちの眼は、何年たっても寮母たちにはつらいようだ。「帰る家があって」といつている心の内がよく分かるからである。

年寄りたちにも自由な時間が訪れた。夕食後の陽は冬でも久住山の彼方に暫く沈もうとしない。広場では笑い声がる。多分、アレの好きな彼がいるにちがいない。性のかすかな発散であろう。しかし、誰もが押し黙る一時がある。夕焼けの時も、曇りの時はなおのこと、雨の時も同じこと、ガラス窓越しの空をジーンと見つめている。

表4 一日の生活の流れ

夏期(6~9月)	冬期(10~5月)
5 起床(鳥の声)	5 起床(鳥の声)
6 洗面(熱いタオルで) お湯を汲みに来る	6 洗面(熱いタオルで洗頭)
7 朝の勤行	7 お湯を汲みに来る 朝の勤行
8 朝食	8 朝食
9 清掃・消拭 マイクロ治療	9 消拭・清掃 マイクロ治療
10 リハビリ放送 リハビリ・娯楽	10 リハビリ放送 リハビリ
11 昼食準備	11 娯楽 昼食準備
12 昼食	12 昼食
13 消拭	13
14 マイクロ治療 リハビリ・リハビリ放送	14 消拭 日光浴
15 娯楽	15 リハビリ・リハビリ放送 マイクロ治療
16 放送(時事・読書等) 夕食準備	16 放送 夕食準備
17 夕食	17 夕食
18	18
19 おやつ	19 おやつ
20 娯楽	20 娯楽
21 自由時間	21
22 } 就寝	22 } 就寝
23 } 就寝	23 } 就寝
24 } 就寝	24 } 就寝

△備考▽

・おむつは汚れた時点で取り替えている。・入浴は週三回。・マイクロ治療は医師の指示に従い
午前9時30分―午後4時の間に実施。・娯楽は室外で日光浴を兼ね、輪投げ、ダンス、歌、ゲー
ム、リズム体操など。夜はテレビ観賞。・機能回復としては平行棒、理学機具を使用。

別れ来た家郷への想いはとめどなく、長い糸のように切れることなく、行きつ戻りつ、時に乱れもつれ、ただ明日に心を託すのであろうか。突然「わしの着物を返せせ！ ころぼう！」常習のしわがれ声が響く。しかし、誰一人眉さえ動かさず、わが想いを追うことに沈みこんでいる。

朝は早かった。夜も早い。八時になるとすっかり静寂に包まれ、室内からわずかに一つ二つテレビ画面の明暗が点滅するだけである。でも、一日はまだ終らない。七時はおやつの間である。うとうとしている人も寮母のおやつですよの声に起き出す。元気な人はお茶を入れて待っていてくれる。

今は一組しか残っていない夫婦の部屋では、老妻がくんだお茶を前に向いあっている。話すことももう無い、手だけが動いている。この夫婦はここに移り来て、わがホームを終生の場と決めて、家屋敷すべて清算した。やがて一人が先立つ、残る一人は住みなれたこの部屋から他へ移らねばならぬことを知っている。応接台をしつらえるなどして作った巣づくりも再びこわれるであろう。

ようやく一日の帳は降りる。

(4) 無断入室お断わり

居室棟と管理棟は一本の廊下で結ばれている。玄関から自由に入れても、居室棟入口に「無断入室お断り」の立札がかけてある。それを見て、見学者の一人は明らかに反感を示しつつ、「見せ

たらアラが出るからか」と反問する場面もある。その態度には施設を低く見ており、劣等処遇当然の考えが溢れている。ホームに住む老人にプライベートなんぞあるものかという考えが、心の中に強く潜んでいるようだ。だから、私たちは誤解を恐れず、方針を貫いてきた。

立札を見て、「ああ、ほんとにそうでした」と自らのうかつさを謝って去っていく人も稀にはいる。わが家、わが部屋に、住む人の心とは無関係に、どやどや入られたらどんなものか。思い半ばに過ぎるであろう。

日本では福祉施設内は大通りの延長のように考えられがちである。公共施設のように自由に入出入りして当然という考えがあり、居住者の心を顧みない。「施設の社会化」の風潮がこんなことを増幅させてはならない。

九州某県、某障害者療護施設を訪問した時、施設長は説明した。「今ではこの町の名所になって年二千人の見学者が来る。ご覧の通り、大型バスが一度に三台も横付けされているように見学者が絶えない。施設が社会の前にこうして開かれていることは重要なことである。入所者にはずいぶん心理的抵抗があったが、ひとりひとり説得して、もう見学者にも慣れてきた」。たしかに、建物は派手に粧われている。

しかし、聞きながら海を少し隔てる愛媛県と同種の施設「たまも園」のことを思い較べていた。ここでは重度障害者も町に出させて、買物をする運動を試みた。初めは住民から障害者を晒し者にしてかわいそうだという非難が浴せられた。しかし、やがて理解され、車椅子を押してくれるよう

になったという。この試みは福祉の本質につながっている。ひとから見られるのと、ひと前に入っていくのでは全く違う。障害者福祉の出発点は「かくすなかれ」運動にあるが、自分が自分の障害者たることを「かくすなかれ」であって、本人の意志と無関係にペールを引きはぐように、見せ者の立場におくことではない。

北欧の施設を訪問すると、誰もが経験することだろう。大きな廊下は大通りのように人が往き来している。陽が射す時は老人がそれを浴びてつくねんとし、通り過ぎる私たちの挨拶にふり向きもしない者もいる。管理者を通じて部屋を見せて欲しいと頼んでも、ほとんどがノーである。

遠く日本から福祉の勉強に来たのだがと説明すると、招じ入れられることも稀にはある。その時私たちは訪問者であり、お客であって、見学者ではない。

ドアは開かれ、どうぞ自由に見てよい、この椅子は先祖からのもの、死んだら寄付するつもりこの軍服姿は夫で、そばのは私の若い日の姿、ベッドだけがホームのもの、後はすべて私のもの……。話しははずむ。日本という観念はなさそうだが、日本のことも質問する。退出する時は、廊下まで出て握手し、見えなくなるまで見送っていた。

だから、私たちは見学を強く希望する人には遠慮せず説明して理解をしてもらおう。廊下からのぞき見せず、挨拶をして入室し、老人たちと話しを交わして欲しいとお願いする。もちろん、寮母たちは、仕事で出入りするそのつど、ノックし、ことわりの挨拶をいっている。